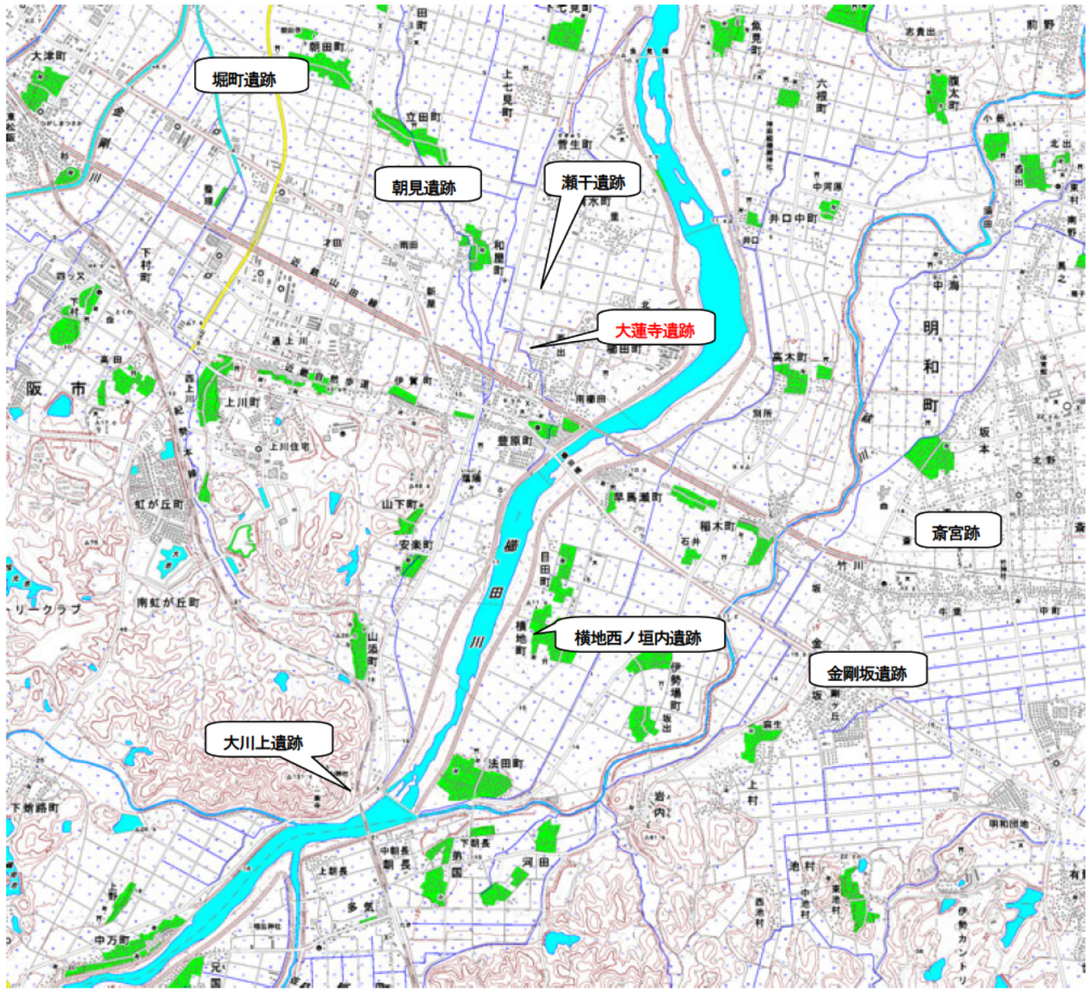


大蓮寺遺跡位置図　（国土地理院数値地図 1:25,000「松阪」を使用）

【まとめ】

今回の調査では、10 世紀後半頃の集落の様相が明らかになりました。とりわけ、掘立柱建物・区画溝・墓のセットが判明し、集落の実態が明らかになったことです。今後は、こうした調査成果を詳細に検討し、10 世紀後半の集落の暮らしぶりを明らかにしていきたいと考えています。

今回の発掘調査の現地説明会が、現代と古代のかけはしになり、古代の人々の生活の一端に触れて頂く機会になれば幸いです。

調査遺跡名	大蓮寺遺跡（第２次）
所　在　地	三重県松阪市櫛田町
調査面積	1,161 ㎡
調査期間	平成 24 年 9 月 13 日～平成 24 年 12 月 25 日（予定）
原因事業名	平成 24 年度一般地方道　松阪環状線地方特定道路整備事業
調査実施機関	三重県埋蔵文化財センター

大蓮寺遺跡（第２次）現地説明会資料

～松阪市櫛田町～

2012 年 12 月 15 日
三重県埋蔵文化財センター

調査区全景（南から）

【はじめに】

大蓮寺遺跡は、松阪市櫛田町に所在し、櫛田川左岸の沖積地に位置しています。平成７年度に第１次調査が行われ、今回で２回目の発掘調査になります。第１次調査では溝跡が確認され、土師器杯・甕・須恵器長頸壺が出土しています。また、周辺域において朝見遺跡や瀬干遺跡など多くの遺跡の調査が行われています。

当遺跡は、昭和 46 年に櫛田神社周辺から多量の瓦が出土している大雷寺廃寺との関わりが想定されていた遺跡です。今回の調査では、大雷寺廃寺に関連する遺構は確認できませんでしたが、瓦が出土しており、今後寺域を考える上で参考になります。

それでは、発掘調査で分かったことについて見ていきます。

【平安時代の遺構について】

今回の調査では、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）を５棟、区画溝（くかくみぞ）を２条、火葬墓（かそうぼ）を１基確認しました。これらの遺構は、出土した遺物から 10 世紀後半頃のものと思われますが、重なり合っている掘立柱建物があるため、何代かにわたってこの集落が続いたものと考えられます。

掘立柱建物１は東西２間×南北２間、四面に庇（ひさし）が１間（けん）ある構造の建物で、この集落の主要な建物と考えられます。

掘立柱建物２は掘立柱建物１と同様に東西２間×南北２間で、庇が北と西に１間分持つ建物です。

掘立柱建物３は４間×２間の南北棟の側柱建物（がわばしらたてもの）です。

掘立柱建物４は南北２間×東西２間で、庇が西に１間分持つ構造の建物です。

掘立柱建物５は南北３間×東西１間以上の南北棟の側柱建物です。

区画溝１は、屋敷地（やしきち）を南側と区画する東西の溝で、出土品の多くはこの溝から出土しました。

区画溝２は、屋敷地を西側と区画する南北の溝です。

火葬墓は、ほぼ長方形で、埋土（まいど）には焼土が含まれています。

作業風景

掘立柱建物１（北から）

【出土品について】

緑釉陶器（りょくゆうとうき）・灰釉陶器（かいゆうとうき）・土師器（はじき）をはじめ多くの土器類が出土しました。特に区画溝から 10 世紀後半頃の土器が出土しており、この集落の成立から廃絶時期を知るうえで重要な資料となりました。

緑釉陶器　・・・緑色の発色をする釉薬（ゆうやく）がかけられて焼かれた当時の高級な陶器。椀（わん）・皿（さら）・壺（つぼ）がある。

灰釉陶器　・・・植物などの灰を溶かして、釉薬として掛けられた陶器。椀・皿・壺がある。

土師器　・・・素焼きの土器。杯（つき）・甕（かめ）・高杯（たかつき）がある。

軒丸瓦（のきまるがわら）、軒平瓦（のきひらがわら）・・・軒の最先端に用いられた瓦。

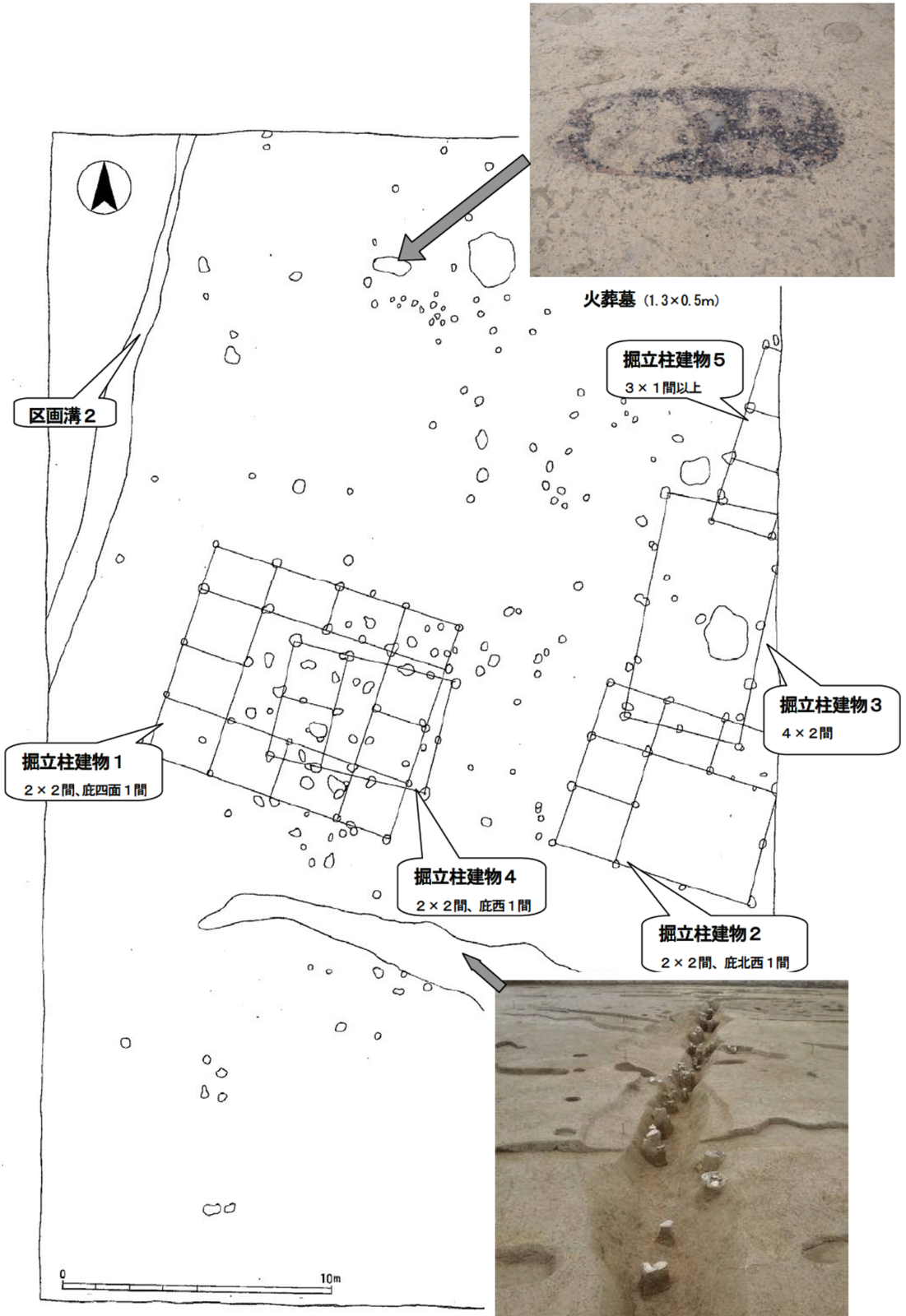
鞴羽口（ふいごはぐち）　・・・銅を溶かしたり、鉄の加工のために風を送る円筒状のもの。

鉄滓（てっさい）　・・・製鉄によって生じたもの、カナクソのこと。

志摩式製塩土器（しましきせいえんどき）　・・・塩を作ったとされる土器。

出土遺物

陰刻花文（いんこくかもん）のある緑釉陶器



調査区平面図（1:200）

区画溝１　遺物出土状況（東より）